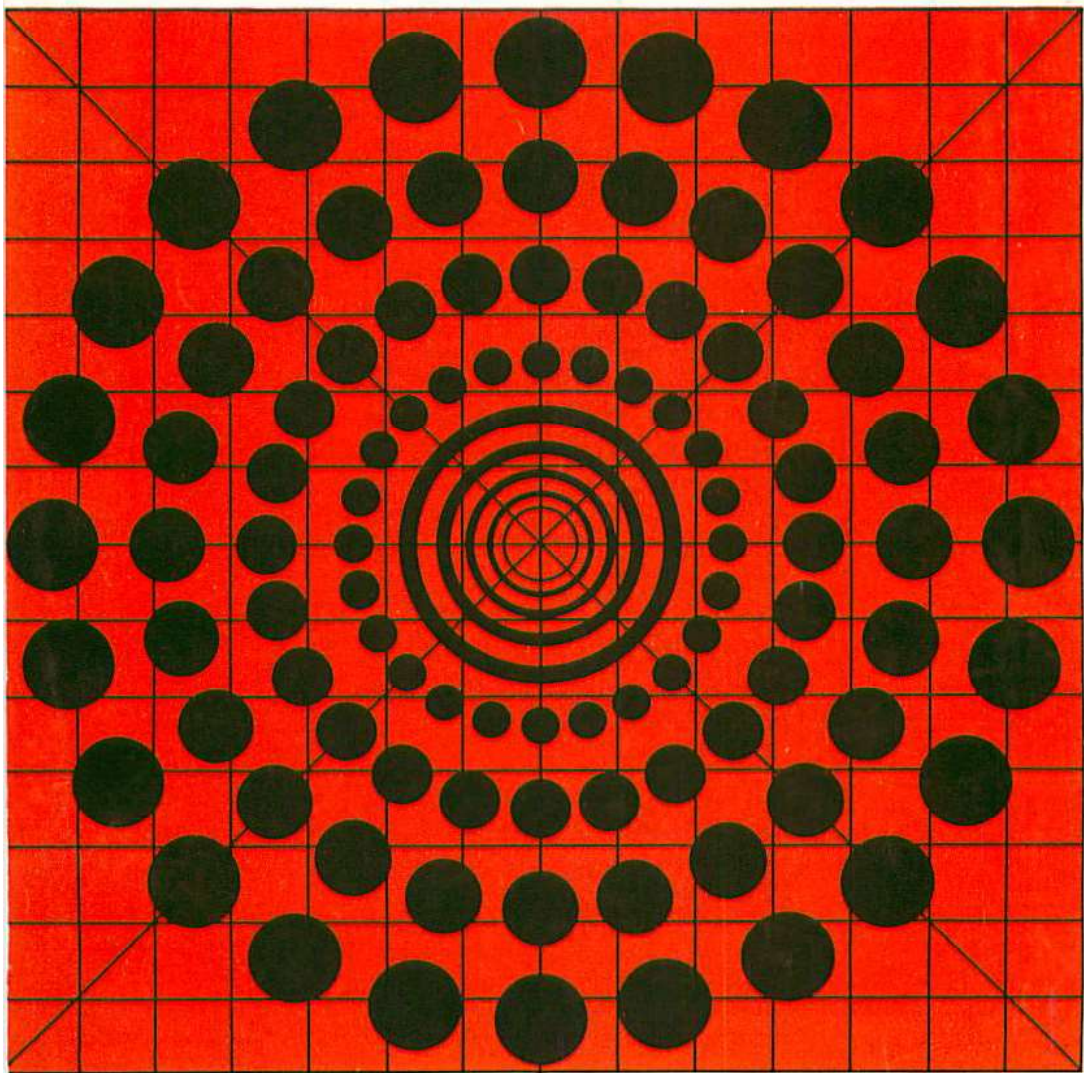


メジカル
ダイジェスト 放送内容第1集

NSB〈日本短波放送〉

プラスミン・シリーズ

㊦ 第一製薬 提供




メジカル

ダイジェスト 放送内容第1集

NSB〈日本短波放送〉

プラスミン・シリーズ

 第一製薬 提供

はじめに

およそ線維素溶解現象が知られたのは歴史的には比較的古く、1880年代に Green および Dastre によって初めて報告され、Fibrinolysis と名づけられた。その酵素がフィブリノリジンすなわちプラスミンである。

1937年に Macfarlane が手術時にこの現象を認めたとの報告をしてから、欧州、米国など海外において大きな関心もたれ、基礎的、臨床的研究が進展し、次のような事実が知られるようになった。

ある病的状態のとき血液中のプラスミン活性度が高まる、すなわちプラスミンの増量が知られた。血液中のプラスミンの増量は、出血傾向、滲出傾向、アレルギー性症状があらわれて疾病を重症化するのである。さらに激しい肉体労働、悪性腫瘍のさいにもプラスミンが増量することが知られてきた。

一方わが国では、約10年前に神戸医大生理学岡本彰祐教授が慶応大学におられたころに、血液研究グループとともに抗プラスミン剤の研究を始め、約350種の化合物を合成し、その中からイブシロン・アミノカブロン酸（イブシロン）という一種のオメガアミノ酸が強力な抗プラスミン作用を有することを発見した。そしてこのイブシロンが临床上、手術時および婦人科領域の出血予防に効果を発揮することが判明して以来、一躍脚光をあびるようになった。以後、多くの研究者によって新しい臨床報告が発表され、多くの疾患に著効を呈することが認められ、とくに最近抗プラスミン剤イブシロンは万能薬の観を呈するほど多大の臨床的応用価値があることがわかり、20世紀最良の薬品が抗生物質であれば、イブシロンはその次に位置するものといわれるにいった。

昨今、海外では、ストレプトキナーゼとイブシロンを同時に投与して血栓を溶解させ、しかも、副作用がないという報告もされている。これは酵素・

抗酵素療法であって、今後大いに興味をもたれるものであろう。臨床に携わるものにとっては、専門のいかんを問わず抗プラスミン療法は重要な治療法のひとつとなったのである。

以上のように線維素溶解現象はきわめて興味ある生体反応であり、一般臨床医家の参考の一助となることを考え、これについて短波放送より半年間「プラスミン・シリーズ」として放送した。幸いに好評を博したので今回これを纏めて小冊子とし、諸家にプラスミンの基礎的事項をも含めた臨床上の諸問題を理解していただきたいと念じている。

東京医科歯科大学教授 大 淵 重 敬

● 目次

> プラスミンとは<1>	■ 安部 英	1
> プラスミンとは<2>	■ 安部 英	7
血液の学会から	■ 五十嵐忠平	13
梅田 博道	■ 岡本 彰祐	19
> プラスミン・世界の話題	■ 岡本 歌子	25
> プラスミン・今年の話	■ 中島 哲夫	31
輸血とプラスミン	■ 齊藤 英雄	37
扁桃炎とプラスミン	■ 長谷川弥人	43
血液病とプラスミン	■ 福武 勝博	49
プラスミンの簡易測定法	■ 佐藤 彰一	53
婦人科出血とプラスミン	■ 米瀬 泰行	59
泌尿器疾患とプラスミン	■ 白岩 俊雄	65
耳鼻科出血とプラスミン	■ 阿部 恒男	65
痒痒とプラスミン	■ 瓶野 倫	71
眼科疾患とプラスミン	■ 植村 恭夫	77
外科領域とプラスミン	■ 神前 五郎	83
藤本 淳	■ 佐藤 彰一	89
ショックとプラスミン	■ 阿部 恒男	89
プラスミン測定の実際	■ 安部 英	95
結核とプラスミン	■ 熊谷 朗	103
藤本 淳	■ 山村 雄一	109
> 副腎皮質ホルモン剤と抗プラスミン剤	■ 梅沢 勉	115
阿部 恒男	■ 伊崎 正勝	121
皮膚疾患とプラスミンについて	■ 山下 久雄	127
放射線治療とプラスミン	■ 五島雄一郎	133
脳血管障害とプラスミン	■ 相馬 広明	139
産科とプラスミン	■ 阿部 恒男	139
血液疾患とプラスミン	■ 日比野 進	147
プラスミンのまとめ	■ 宮木 高明	153
イブシロン	■	158
あとがき	■	164